

講演会（第 66 回例会）

演題：災害から命を守るために

実施期日：平成 30 年 6 月 28 日（木）

会場：アオッサ 706, 707 号室：

講師： 福井防災士の会事務局長 飛田幸平氏

参加者：70 名（内新会員 1 名）

進行担当の安本氏が、氏は福井市消防局に採用されて以来、定年まで消防関係の要職に力を注がれ、退職後は公益社団法人ふくい市民国際交流協会常務理事、現在は第一防災株式会社取締役専務として活躍されていることを紹介し、詳しいプロフィールは氏の講演の中から読み取っていただきたいと紹介して講演に入った。

講演要旨

1. 忘れてはいけない東日本大震災

「昨日の夕食には何を食べましたか」と訊かれると大半の人が応えられるが、「今日は何の日ですか」と訊かれると、6 月 28 日は福井大震災が起きた日で、福井県民にとって忘れ難い日であるにも関わらず、70 年も経過すれば大半の人が忘れてしまっている。福井県では 6 月 28 日を中心に防災訓練を行うのも、悲惨な体験をしたあなたたち（当例会参加者）を含め、多くの経験豊かなお年寄りに語り継いでいって欲しいという意図を持ってのことである。1995 年 1 月に起きて大騒ぎした出来事も、3 月になるとパタッと忘れられてしまった。それはさらに大きな事件・オウム真理教のサリン事件が起きたからである。東北地方を巨大な地震が襲ったのは 2011 年 3 月 11 日だったが、今後どれだけの年月を経ようとも、この大災害を忘れず、日本国中の人々に語り継いでいって欲しいものだ。

2. 救助活動に従事して

ごく最近まで日本は、数十年に一度の大きな災害はあったというもの、「安全な国」とみなされていたが、近年になって新潟中越沖地震、神戸淡路大震災、東日本大震災、熊本地震と立て続けに大きな地震が起きたのに加え、火山の噴火、台風、水害等自然災害が頻発し、おまけにテロや鳥インフルエンザまで加わって、今や日本は「災害大国」と揶揄されるまでになっている。

我々が生活をしていると、好むと好まざるに関わらずいろいろなトラブルやアクシデント、ハプニングが起きる。トラブルは「トラブル続き」という言葉もあるように、頻度が必ずしも少ないとは言えないのに対し、アクシデントやハプニングは起きそうもないことが起きてしまった場合に使い、前者はどちらかと言うと望ましくないこと、後者は良いことにも悪いことにも使う。自然災害も不意打ちを食わされる類で、常に用心を怠ってはならない。

阪神淡路大震災を体験したことで、被災者は、避難所には小学校を選ぶのが有効であるこ

と、そこでは被災者同士が役割の分担をして助け合うこと、また、建物の耐震化を進める必要性があることなどの教訓を学び取り、同時に自助、共助の必要性に目覚めた。結果として市の管理も「防災課」から「安全危機管理課」と名称を変えることになった。福井市も「危機管理室」に名称を変えた。

3. 東日本大震災への私たちの援助活動

私たち福井市防災センターでは緊急消防援助隊として3月12日（土）の真夜中1:45～2:00に集合し、23台の消防車を連ねて発生から11時間と14分後に東北へ向けて出発したが、行き先は未定だった。取りあえず新潟から磐越自動車道を経て東北自動車道を進んでいった。最終的には越前高田を拠点とすることになったが、所要時間30時間59分であった。消防自動車はリッター3Kしか走らないので、合計6回ガソリンを補給した。いずれも手動での給油だった。海岸へ向かう走行中での高さ8mにも及ぶ瓦礫の山には驚いた。NEXCO東日本（東日本高速道路KK）が道路修復作業を迅速に進めていたのは有難かった。

越前高田市の被災直前の人口2万4千人のうち、13人に一人の割合に相当する1,555人が死亡した。行方不明者も240人に上った。怖いのは「自分だけは大丈夫」と一人合点することで、もはやひとごとになっていることを自覚しなければならないのだ。一番欲しいのは正確な情報なのだが、その正確な情報は入らずに、デマが飛び交うのが実情である。脈、呼吸、瞳孔で生死の判断をするのだが、医者以外には判断すべきではなく、余裕があれば出来るだけの救命措置を講じるべきである。遺体はきれいに洗って遺体安置所である米崎中学校体育館へ収容されるのだが、そこで正式に検死が行われるとのこと。

4. 福井県隊における活動結果

本県の救助隊は3月11日から22日までの78隊で、救出人数は57人であったが、残念ながら全員が死亡という結果だった。

5. まとめ

防災に対する心構えという点では、先ずは自守防災である。もし揺れを感じたら、揺れの大小を見極めないで、自分の安全だけを確保することである。地震時に持ちだすのは自分の命以外にはないことを肝に銘じなければならない。金目の物、肉親の安否、逃げ場のことなど一切を無視して頭を保護し、頸動脈を守ることに全神経を集中すべきである。地震は、1日の3分の一は無防備に寝ている夜に発生するので、できれば夫婦一緒に寝る方がよい。

一方でみんなが自分の生活を守り維持していくためには、地域のコミュニティでの互・近助が必要で、個人ではなく組織の力が必要となっていく。防災は地域のつながりから力を発揮できると言っても良いものだ。

「釜石の奇跡」という教訓がある。釜石は古来から防災に関心の深い地域なので、日ごろの訓練が多くの小中学生を救ったという実話だが、福井県民にも日ごろから防災に関心を持って頂きたいとの願いを要請して氏の話は終えた。

軽快な口調、明快でユーモアあふれる氏の話っぷりに、参加者は魅了されながら聞き入っていた。

以上 大野 記